学びのたより

東海国語教育を学ぶ会
２０１１年１０月８日
文責：ＪＵＮ

からだいっぱいに、言葉の世界を愉しむ

―１年「がぎぐげごの　うた」の授業から―

１　１年生１学期

「１年生の１学期の子どもって、そうなんだよなあ!!」

Ｉさんから送られてきたメールを読んで、わたしの口から思わず出てきたことばはそういうものでした。Ｉさんが書いていたこと、それは、子どもたちは、すぐ体が動き出す、場合によっては踊り出してしまう、そしてそれがなんともかわいいということだったからです。

幼稚園・保育園で、いわゆるお遊戯なるものを経験してきた子どもたちが何かにつけて踊り出すということはよくあることです。しかし、この時期の子どもがからだ全体で反応するのは、何もお遊戯をしてきたからだけではありません。そもそも子どもたちのからだには、リズムに出合うと動き出すスイッチが入っているのです。

軽快な音楽が響いてくれれば、子どもたちはリズムに合わせて踊り出します。入学前の園で概念的な動きが指導されているとそれが出てくることもありますが、基本的にはこのからだの動きは好ましいものです。ところが、Ｉさんにはそういうことはありませんが、音楽以外の教科になると、教師は、子どものからだの動きを止めるような働きかけをしがちです。学校とは、園と異なり、椅子に座ってお行儀よくお勉強する所なのだとわからせようとするからです。

しかし、子どもがからだで反応するのは、何も音楽に限ったことではないのです。なかでも、もっともそれが顕著なのはことばに対してです。ことばには、音楽的な要素が存在しているからかもしれません。いえ、それより以前に、ことばがからだにくっついているものだからでしょう。ことば・声は、本来、からだ全体の動きやからだの調子などとの密接なつながりにもって発せられるものだからです。

だとすると、幼児期の子どもが、ことばに触れてからだが動き出すこと、踊り出すことはごく自然なことだと言えます。当然成長につれ理性的なものが働くからか動きは小さくなっていくのですが、この幼児期の子どもの動きにこそ、人がことばに触れる原点があるのではないでしょうか。

Ｉさんのメールを読んで頭に浮かんだのは、１年生のこの時期に、からだの動きを必要以上に止めてはいけないということでした。もし、概念的な動きが身についていたら、それは是正しなければいけません。ことばに対する自然なからだの動きではないからです。しかし、からだ全体でことばに触れようとする動きは、むしろ大切にしなければならないのです。

Ｉさんがわたしにメールをくれたのは、彼女が、７月末に行う「授業づくり学校づくりセミナー」の分科会において報告をすることになっていたからです。しかも、今、現在、担任しているクラスにおける１年生１学期の実践で。

そのＩさんが、報告のタイトルとしたのは「読むこと大好き、聴くこと大好き、表現することもっと好き」というものでした。そこには、ことばに出合い、読み、聴き、そして、からだ全体で表現する、そういう子どものすがたを参加者の皆さんに見てもらって学びたいという意識が強く感じられました。

こうしてＩさんの授業づくりが始まったのです。

２　「解釈」から言葉の世界の「味わい」へ

Ｉさんが、報告する授業のテキストとして選んできたのは、「おさるがふねをかきました」（まどみちお)、「おむすびころりん」でした。二つとも、彼女が以前に１年生を担任したときに手ごたえを感じていたものです。わたしは、今度のＩ学級の子どもたちが、この二つのテキストをどう読み味わうのか、楽しみになりました。

しばらくして、「おさるがふねをかきました」の授業を撮影したＤＶＤが送られてきました。そこには、とても１年生とは思えないほどしっかりした子どものすがたがありました。彼女の授業を見るといつも思うことですが、Ｉさんが子どもの前にいるだけでどの子どもも意欲たっぷりになるのです。まるで魔法にでもかかったかのように。もちろんそれは日頃の彼女の子どもたちへのかかわりの結果なのですが。

そのうち授業の話題が「おさるはどうしてしっぽをつけたのか」になりました。２人の子どもが詩を音読します。じっと考えるように聴き入る子どもたち。音読が終わって、Ｉさんが子どもたちに語りかけます。「おさるの気持ち、聴かせてくれる？」と。すると、子どもたちが、詩が板書されている黒板のところに次々と出てきて、そこにいるＩさんに懸命に語り始めたのです。

こうた「最初にね、煙突立てて、さみしいからね、しっぽ立てたん」

かすみ「あのね、おさるさんね、自分にしっぽついとるから、（自分と）同じでね、しっぽ描いたんかなあ」

まい「おさるさんもね、自分にしっぽついとるからね、おさるさんとおそろいでね、しっぽつけたん」

はると「ここに『さびしい』と書いてあるでさ、だからつけたんとちがうん」
子どもたち（何人もがつぶやく）「いっしょ」

なんと素直な子どもたちでしょう。どの子どももＩさんから示された問いに懸命にこたえています。しかも、子どもたちの言っていることはどれも全うなことばかりです。さらに１年生としてすごいと思うのは、子どもの発言につながりがあることです。そうです。子どもたちは、友だちの言うことを聴いたうえで自分の考えを述べているのです。

けれども、この調子で何人もの子どものことばを聴くうちに、わたしの心の内に、少しばかり居心地の悪さが生まれてきたのです。わたしは、それがどういう種類のものなのか考えました。そして気づいたのは、詩の読みが「理解」に走っているということでした。

その読み方が完全に間違っているというわけではありません。けれども、「どうしてしっぽをつけたのか」という詩の読み方では、おさるの行動を外から解釈するものになってしまいます。こうこうこういうわけでしっぽをつけたという解釈に…。わたしは、思いました。「なぜしっぽをつけたのか」を理解することよりも、しっぽをつけたくなったおさるになることのほうが大切なのではないかと。微妙な違いですが。

詩の読みは、「なぜ」「どうして」と考え、何かを理解しようとしたところから、理屈に陥る、それは以前より考えていたことでした。強いインパクトを伴ってそのことに気づかされたのは、今から２５年も前のことです。

それは、国語教育を学ぶ会が毎年夏に開いていた研究大会に谷川俊太郎さんを３年続けて招いたときのことでした。わたしたちは、谷川さんの詩の授業に取り組みました。そして、その結果生まれた授業を、その詩をつくった詩人である谷川さんに見ていただいてコメントをもらうという、なんとも贅沢な研究会を企てたのです。

しかし、その企画は、その贅沢さを呑気に楽しむものにはなりませんでした。谷川さんがわたしたちの授業に対して語ったことばがあまりにも衝撃的だったからです。この３年間で、わたしたちは、これまでに抱いていた詩の授業のイメージを、大きく転換せざるを得なくなったのです。それはわたしたちにとってなんともショッキングなことでした。そして、その後、安易な気持ちで詩の授業ができなくなったように思います。

この３年間の大会の記録は、国土社から２冊の本にして出版しました。『子どもが生きることばが生きる詩の授業』と『「にほんご」の授業』です。

以下の文章は、『詩の授業』における佐藤学先生が記された「まえがき」の一部です。この文章を読むことによって、当時のわたしたちの衝撃がどのようなものであったかの概略はわかっていただけるものと思います。

第一は、詩の授業における中心的な軸を「解釈」と「理解」から「味わい」と「愉しみ」へと転換する課題である。これまでの詩の授業では、作品との出会いによって触発された子どもの感覚と感性に即して詩を味わい愉しむというよりも、ともすれば、作品それ自体を完結したものとみなし、教師が解釈した「作品の主題や心情」を子どもに理解させることに終始する傾向に陥りがちであった。（中略）

第二は、詩の教育を「ことばの教育」「日本語の教育」という広がりのなかで捉え直すことである。実際、谷川さんの作品は日本語の特性を豊饒な土台とした言葉の世界を提供しており、その作品を味わうことは同時に日本語の豊かさを味わうことにつながっている。しかし、これまでの詩の授業では、授業の中心が言葉の意味の理解や作者の心情の理解に傾斜しており、日本語のことばの音韻のおもしろさ、響きの豊かさや意味の多義性を愉しむことは充分自覚されてきたとは言えない。（1988 年 6 月 10 日発行『子どもが生きることばが生きる詩の授業』国土社刊より）

あれからもう２５年経ちました。四半世紀です。その長い年月のうちに、当時のことを知らない会員が圧倒的に多くなりました。もちろんＩさんもその１人です。けれども、わたしの心の中では、この日の衝撃はずっと生きていました。というより、わたしの文学観はこの時を契機にまっとうに形作られていったというべきです。

その衝撃から学んだこととは、佐藤先生のことばが示すように、詩は理解するものではなく味わうものであるということであり、詩によってはからだごと日本語の豊かさを味わうものがあるということでした。それはまさに、「解釈」する授業への決別であり、「読み味わう」授業、「ことばの豊かさに出合う」授業への出発でもありました。Ｉさんの授業を見ているうちに、それが、２５年の年月を超えて、わたしの中に甦ったのです。

３　「がぎぐげごの うた」をテキストとする

「おさるがふねをかきました」の授業ＤＶＤを見たわたしは、すぐにＩさんにメールをしました。それは、この授業での子どものすがたが素敵なこと、しかし、その一方「どうして」という読み方が理屈になってしまっていること、けれども、その問いを懸命に考える子どもはなんとも健気であるということでした。そして、同じまどみちおの詩で「がきぐげごの うた」というのがあるので、どう授業するかなどと硬く考えないで、いっぱい音読して、声に出すことを愉しむようにやってみてはどうかと伝えたのでした。こうして彼女の「がきぐげごのうた」の授業が実行されたのです。

わたしが「がぎぐげごの うた」で授業をするよう勧めたとき、Ｉさんはどういう心境だったのでしょうか。そのときの心境を、彼女はセミナーの報告書に次のように綴っています。

ことば遊びは、４月にもうやりました。「今さら・・・？」という気持ちでした。でも、石井先生には、わたしに足りないものや、今の子どもたちに合ったものが見えたのかなとも思いました。これからの方向が分からなくなっていたわたしは、軽い気持ちでやってみることにしました。

Ｉさんは、ことば遊びの詩は、小学校入門期に必要なものと考えていたのかもしれません。ことば遊びの詩は、読むこと、音読することを楽しく感じさせる魅力をもっていると感じていて、だからこそ入学間もない時期に集中的に取り扱ったのでしょう。それはそれで、決して間違ってはいません。

けれども、この種の詩は、前述した佐藤学先生のことばにあるように「日本語の特性を豊饒な土台とした言葉の世界を提供」していて、「その作品を味わうことは同時に日本語の豊かさを味わうことにつながっている」のです。

わたしは、子どもたちを日本語の豊かさに出合わせたいと考えました。あれだけ意欲的に学べ、しかもからだ全体での反応が豊かに表れるＩさんの学級の子どもたちならそれが可能だと考えたからです。

Ｉさんは、この詩を「軽い気持ち」で子どもたちと読んだと述べています。どうやら「がぎぐげごのうた」は、こう読めたらいいとか、何かを読みとらなければといった教師が陥りがちな思いを消し去ってくれたようです。こうしてＩさんは、無心になって子どもと向き合うことになりました。

４　からだ全体で味わった「がぎぐげごの うた」

授業が始まると、Ｉさんが黒板に詩を書いていきます。子どもたちは、Ｉさんが１行書くたびに声に出して読みます。その声が弾んでいるのです。この時点で、子どもたちはこの詩の面白さを感じ取ったようです。途中、「ぼうぼう」は「ぼ・う・ぼ・う」ではなく「ぼーぼー」と読むとか、「ぽっぽう」をどう読むかとか、子どもの状況に合わせた指導を入れています。

全文を書き終わるまでに８分はかかったでしょうか。ここまでで子どもたちは、かなり声を出しました。けれどもそれは、詩を細切れのようにして読んだだけです。Ｉさんは、ここで詩全部の音読を指示します。すると、子どもたちは、めいめい好きなように読み始めます。

しばらくして、Ｉさんから声がかかります、「ひとりで挑戦」と。こうして、７人の子どもが次々とみんなの前で音読をしたのです。まだ読みにくそうにしている子どももいます。すると、Ｉさんは、子どもが読みにくそうにしている

部分をみんなでゆっくり読んでみるようにしたり、口をしっかり開けるように指示したりします。そのうえで、もう一度、めいめいで読んでみるように指示します。

子どもたちの読み声がさざ波のように教室に響きます。子どもたちの読むことばが明確になっています。リズムが出てきました。なかには、からだが動き出している子どもがいます。歌のようになってきている子どももいます。それは、１人ひとりの子どもが、「がぎぐげごの　うた」を自分のものにしつつあることを表していました。

やがて、めいめい読みをしている子どもたちにＩさんから声がかかります。「はい、じゃあ、聴かせてもらおうかな。めぐみさんがすっごく素敵な口、開いてたの。めぐみさん、挑戦」

めぐみは自分からはなかなか読もうとしない子どもなのでしょう。そういう子どもの読み声を何人もの声が重なり合うめいめい読みの中で注意深く聴き分ける対応に、すべての子どもが安心して学ぶ教室が生まれるわけがあるのでしょう。指名を受けためぐみが立ちあがって音読をします。

めぐみは手を前後にゆらせ、リズムをとるようにして読み始めました。「がぎぐげ」「ごぎぐげ」と一節一節区切るようなリズムで。これはこれでリズムがとれています。めぐみのからだの動きは手だけに留まりません。足のかかとも上下させています。そのことによって、からだ全体が声と一体になってゆれているように見えます。読み終わると、子どもたちから「おもしろかった！」という声が出ます。

２人目はちとせです。まず息をいっぱい吸って読み始めました。からだが前後にゆれ始めます。と言っても、その動きはめぐみほど大きくはありません。控え目な動きです。ちとせはめぐみのように一節一節区切って読みません。「がぎぐげ　ごぎぐげ　がまがえる」と続けて読みます。つまり、一行一行のリズムです。

ふと気がつくと、ちとせの読みにつれて、何人もの子どものからだがリズムをとってゆれています。面白いのは、「おおだいこ」を叩く真似をしたり、「のびたかみ」でリズムに合わせて髪の毛のぼさぼさを手で表したり、「はとぽっぽ」で鳩になったりする子どもがいることです。それは、まるで、教室中が詩のリズムでゆれているような光景でした。

授業者であるＩさんから、このようにしなさいという指示があったわけではありません。何度も何度も音読をするうちに、自然に子どものからだが動きだしたのです。「おおだいこ」が出てくることも「のびたかみ」がどんな状態になっているかも、Ｉさんは何も問いませんでした。つまり、ことばの意味は全く表に出さなかったのです。にもかかわらず、子どもたちは、何が出てきて、それがどういう状態なのか、それが音の響きとどんなにマッチしているか、それ

を直感的に感じ取っていったのです。その子どもの楽しそうなこと、まさに、日本語の音をからだいっぱいに愉しんでいる、そういうすがたでした。１人の子どもの音読にすべての子どもが聴き入り、詩を味わいからだ全体で反応している、わたしは、これこそ、１年生の子どもの学び合うすがたなのだと思いました。

指名しての音読は後２人行いました。そして、Ｉさんの口から出てきたのは、まさにＩさんならではの指示でした。

「そろそろみんな踊り出しそうやから、好きにやっていいです。お友だちといっしょでもいいです。（教室の）後ろ（の空いている所）に行ってもいいです」

子どもたちがさっと動き出します。あちこちでグループができます。教師が組み方を指示したわけではありません。子どもたちが自分たちの意思で組んでいるのです。なかには、机のところから動かない子どももいます。Ｉさんは、そういう子どものところに真っ先に行って、１人で音読するつもりであることを確かめています。グループを組んで群読のようにすることも、１人で読むことも、Ｉさんはどれも認め、それを支援しようとしているのです。

グループを組んだ子どもたちはどう読もうかと話し合うようなことはしません。いきなり読み始めます。声を出しながら読み方をあうんの呼吸でわかり合っていきます。やがて、あっちのグループでもこっちのグループでも身体表現が加わるようになります。それはまったく自然な成り行きでした。こうして教室は、子どもたちの自由な表現でいっぱいになりました。まさに、「表現することもっと好き」の世界でした。

どのくらいの時間、そういう状態が続いたのでしょうか。Ｉさんから声がかかり、それぞれの音読を披露しあうことになりました。

子どもたちは、グループ毎に次々と教室の後ろに行って、自分たちの考えた音読をしました。それがどんなに愉快で、工夫に満ちた、魅力的なものであったか、また、リズムと日本語の音の世界を表したものになっていたか、それをこの紙面において伝えられないのが残念です。わたしは、子どもは、日本語の音を感じ取り、詩に存在するリズムをとらえると、こんなにも溌剌としたこんなにも生き生きとした表現を実現させるのだと感動して見つめました。それは、子どもの声とからだの動きが見事につながり、ことばの世界をたっぷり味わうものになっていました。

授業は、グループはもちろん、グループを組まなかったすべての個人の音読も聴いたところで終了しました。授業を終えたときの、子どもたちの満ち足りた表情が、この時間の学びがどれだけ楽しく魅力的なものであったかを表していたのでした。

５　終わりに

Ｉさんは、セミナーの報告書の最後を次のように結んでいます。わたしは、ここに、Ｉさんが今回の実践で学んだすべてがあると思っています。そして、それは、Ｉさんだけではない、すべての教師たちに大事にされなければならないことに違いありません。ことばの教育とは何なのか、詩を読むとはどういうことなのかを考えるために。

それにしても、Ｉさんのクラスの子どものすがたは魅力的でした。それは、授業がどうのこうのというより以前に、とっても大切なことなのだと思います。Ｉさん、本当にありがとうございました。

１年生は、１学期のうちに、ひらがな５０音と濁音、長音、促音、拗音、それに「は」「を」「へ」などの助詞も学習します。わたしの中には、徐々に焦る気持ちが出てきてしまいました。４月にことば遊びをやったから、もうあとは、書くこと、お話すことに重点を置こうとしていました。子どもたちの目が輝くような楽しい授業がしたいと思う一方で、文字やことばを教え込む方法を考えたりもしていました。

今回の授業を通して、わたしは、『にほんご』（福音館書店）のあとがきに書かれている次のようなことばが、ほんの少しわかったような気がしました。

――　言語を知識としてというよりも、自分と他人との間の関係をつくる行動のひとつとして、まずとらえています。そのためには、ことばの意味伝達、感情表出のはたらきと同時に、意味や音韻面での遊びの要素も無視できません。ことばの豊かさをまるごととらえること、言葉は口先だけのものでも、文字面だけのものでもなく、全心身をあげてかかわるものだということを、子どもたちに知ってほしいと思います。――

１年生の１学期、もっとゆっくり、もっとたっぷり、文字やことばを楽しんでいいのかなと思えるような経験でした。

子どもが語彙を増やし、生きたことばを使いだすのに、どういう道順をたどるのか、どんな学習を系統的に進めていけばいいのか…わたしにはわかりません。だから、ことば遊びもつながりのない、行き当たりばったりの学習になってしまいました。ことば遊びが、どのように子どもの生きたことばにつながるのか、即効性はないと思います。でも、この子たちが、いつか豊かなことばの使い手になることを願って、２学期も、ゆっくりとことばの学習を楽しんでいきたいと思っています。